愛知教育大学研究報告，54（教育科学編），pp. 117～127, March, 2005

事実・生き方の記録（ノンフィクション）の「学び方・評価」学習

―「アラスカとの出会い」（星野道夫　中３・光村図書）を例に―

佐藤洋一*　蔭山江梨子**
Yoichi SATO　Eriko KAGEYAMA

*国語教育講座
**聖霊中学・高等学校

1　国語科教材の実態と課題
―伝記・記録・ルポルタージュ等の教材の授業・評価開発―

現在の国語科教育では，教材文の二大別として「文学的文章」または「説明的文章」という概念が一般に浸透している。それぞれの文章指導のあり方について，これまでも多くの諸理論・実践が提案されてきた。

しかし，子ども達が日常接する「情報」は決してこの「文学的文章」「説明的文章」という二つの概念だけで括ることはできない。それほど現代社会の中にあふれる「情報」は多様である。

こうした情報社会を生きる上で必要となる言語能力を育成することが，これからの新しい国語科教育に求められている課題と言えるが，同時にそのための新しい授業を開発することが求められている。「文学的文章」「説明的文章」という二つの概念だけでは十分にとらえられないジャンルや教材を，子ども達の関心や知的な好奇心との関わりから国語科授業の中に位置づけることが必要である。

これまで小中学校の国語科教材には，「マザー・テレサ」（東京書籍・小５），「宮沢賢治」（同・小６）「田中正造」（教育出版・小６），「無医村の優しい人々」（同・中３）といった伝記・記録・ルポルタージュが数多く存在してきた。しかしこれらの教材は，いわゆる先の二つの概念のいずれにも属し難く，研究的にも実践的にも取り上げられることが少なかった。例えば，『国語教育研究大辞典』（明治図書　1988年）には「ノン・フィクション」の項目（658～659ページ，北条常久氏）があるが，ここには小中学校における伝記・記録等の指導と説明文・文学教材の指導との関連性や構造等については全く論じられていない。

本稿では，こうした伝記・記録・ルポルタージュといった，事実を記述している教材に「文学的文章」や「説明的文章」の二分類の応用・発展的な教材価値があると言う立場から，今まで曖昧な位置づけをされてきたこれらの教材を「ノンフィクション教材」としてとらえ直し，教材の意義や特質・指導方法について明らかにしようとするものである。

2　子ども達の実態と「学び方・評価」上の混乱
―徳目的学習か，感想を話し合うか？―

事実の記録であるノンフィクション（伝記・記録・ルポルタージュ等）では，ある時代を生きた人物の生き方や感じ方・考え方等が，筆者や語り手と言う固有の立場から述べられている。このような事実の記録であるノンフィクション教材は，子ども達自身の生活経験や現実と結びつけて考えやすい。特に日々の人間関係やこれからの生き方について悩むことの多い小学校高学年から中学・高校生の子ども達にとっては魅力的な教材となる。何より「事実」には説得力と迫力がある。実際，『五体不満足』（乙武洋匡著　1998年10月）や『だから，あなたも生きぬいて』（大平光代著　2000年２月），『盲導犬クイールの一生』（石黒謙吾著，秋元良平・写真　2001年４月）等のいわゆるノンフィクションが大人のみならず小中学生にも広く読まれ，子ども達の感じ方や考え方に大きな影響を与えている。

もちろんノンフィクションのこうした教材性は従来から指摘されており，教材を読んで自分の「生き方」を考えさせるという指導法は，指導書でも多く取り上げられてきた。しかし学習過程のあり方が段階的でなかったり，徳目的・道徳的な狭い教材観であったりして，子ども達がどのくらい学習の成果を自分の生活経験につなげて考えることができていたのかも曖昧であった。「○○のような生き方に感動した」といった表面的な感想を述べるにとどまっていたとも言える。

ノンフィクションには，「事実をある立場から正確に記した記録の文体」の側面と，二十世紀に成立したルポルタージュ，ドキュメンタリー等にみられる「時代の常識に対する文明批評」「筆者（作者）独自の感性や認識による独特の語りや描写」の二つの側面がある。小中学校における伝記・記録等の教材はこれらの両者の言語技術が未整理のまま指導されてきた。したがって，こうした「記録の文体」「時代の常識に対する文明批評」「筆者独自の感性や認識による独特の語りや描写」等と言った特質を踏まえた上で，発達段階に応じた授業を構想する必要がある。

3　〈情報モデル〉としてのノンフィクション教材と「到達目標（評価基準）」を明確にした授業・評価
―説明文・文学教材学習の「応用・発展的学習」―

学習の成果が一つの教材だけにしか生かされないようなこれまでの読解・要約型の指導のあり方を克服するために，ノンフィクション教材を〈情報の一モデル〉としてとらえることが重要である（文献10～12参照）。

いわゆるノンフィクション教材を〈情報モデル〉としてとらえることには，次の二つの意味がある。

(1)ノンフィクション教材には，複雑な現実の意味を筆者の立場から「理解」し，自分の生き方や感じ方・考え方を個性的に「発信」した人間の姿が描かれている。教材の正確な理解を通して，人物（筆者）の生き方や事実の感じ方・考え方を学び，それを自分自身の生き方や感じ方・考え方を考える際のモデルとして生かすということである。

(2)ノンフィクション教材は，筆者が現実の中から「情報」を正確に「理解」し，それを個性的に「収集・選択判断・構成・発信」したものである。そのため，子ども達自身が自分の立場で「情報」を「理解」し「収集・選択判断・構成・発信」していく，そうした“情報リテラシー”“コミュニケーション能力”育成のためのモデルとして教材をとらえるということである。

複雑な現代社会を生きる子ども達にとって，現実のとらえ方や人間の生き方を示唆するノンフィクション教材は，自分自身の生き方を考え，新たな「情報」や自分らしい生き方を発見していくための有効な〈情報モデル〉となる。

また，情報社会を生きる子ども達に“情報リテラシー”を身につけさせることは，今日の教育における重要な課題である。現実の中から「情報」を正確に「理解」し，個性的に「情報」を「収集・選択判断・構成・発信」しているノンフィクション教材は一つの〈情報モデル〉となる。ノンフィクション教材という〈情報モデル〉を使って，子ども達の“情報リテラシー”の育成を図ることができる。

このようにノンフィクション教材を〈情報モデル〉としてとらえることによって，ノンフィクション教材の意義がはっきりとし，その必要性も明確になる。

実践にあたっては，ノンフィクションという一つの〈情報〉が子ども達の経験や現実，そして「生きる力」の育成につながるよう「到達目標（評価基準）」の明確な学習過程を構成することが必要である。そのためにはまず，いわゆる説明文教材や文学教材の「学び方・評価」の言語技術を応用・発展させたノンフィクションの「学び方・評価」の言語技術を明らかにし，ノンフィクションを“正確に”“豊かに”理解させ，発信・交流する学習段階へ展開させることがポイントとなる。

4　ノンフィクションの「学び方・評価」の言語技術

(1)筆者の立場の理解

ノンフィクションに記述された「情報」（事実やメッセージ等）を正確に理解するには，それを発信している筆者の立場や視点の特質を理解する必要がある。

筆者の立場とは，経歴・年齢・職業・発表した著作・感じ方や考え方等のことである。経歴・年齢・職業は，学習の導入にあたり，簡単な年譜を資料として配布することが一つの方法である。発表した著作は，導入の意欲づけとして簡単に紹介してもよいが，教材の理解学習のあと読書活動に発展させる際に紹介することも可能である。感じ方や考え方の理解については，教材の理解学習を補充・発展する形で，他の著作からの引用を組み合わせながら行なうと効果的である。

(2)時代の常識的な価値観の理解

ノンフィクションは，その時代の常識的な価値観に対する“批評性”をもっている。その時代の常識，一般的な感情・観念について，子ども達自身の生活経験をもとに考えさせるとよい。時代の常識的な価値観と人物（筆者）の生き方や感じ方・考え方とを比較することによって，人物(筆者)の問題意識や現代へのメッセージ（批評性）がより鮮明となり，ノンフィクションが単なる特異な人物・事実の個性的な記録ではなく，普遍的な意味をもっている作品であることがわかる。

(3)現代へのメッセージ（批評性）の理解

人物（筆者）独自の生き方や感じ方・考え方等と「時代の常識的な価値観」とを比較することによって，現代へのメッセージ（批評性）を理解させる。教材文のみではわかりにくい場合は，筆者の他の著作から類似のメッセージが書かれている部分を引用して紹介したり，関連したテーマの作品を紹介したりする。現代へのメッセージは，単にメッセージの内容を理解するだけではなく，子ども達自身が自分の生活経験と結びつけてメッセージを受けとめ，自分の生き方や感じ方・考え方について考える際の〈情報モデル〉として生かすように指導することが大切である。

(4)エピソードの選択と場面構成の理解

筆者は，ある意図や判断をもって，特定のエピソード（事実・具体例）を選択し，それを構成している。状況設定・展開・発展・まとめといった場面構成や選択されているエピソード（事実）の内容と意味等を，シンプルな「学習シート」の形式で確認する。場面構成の区切り方は指導者が提示し，子ども達にはエピソードのキーワードとなる部分を抜き出して書かせる。さらに現代へのメッセージ（批評性）を理解するのにポイントとなる部分については補足的に意味を確

認する。こうした理解学習は１～２時間で，子ども達の思考の負担にならないよう工夫しながら行なう。

(5)表現方法の特色の理解

ノンフィクションは「記録の文体」と「詩的な描写」と言う二つの表現技術で表現されていることが多い。「記録の文体」とは，事実をある立場から切りとり，数字（時間・年齢等）や固有名詞（場所・名前等）等を明示し，精密に分析的に表現した文体のことである。「記録の文体」からは，正確で論理的な事実の記録の方法とその効果的表現技術を読み取ることができる。「詩的な描写」とは，筆者独自の感性や認識による独特の語りや描写のことであり，具体的には比喩やイメージの使い方，会話や心理描写等のことである。「詩的な描写」からは，個性的で文学的な現実のとらえ方や表現の方法とその効果的表現技術を読み取ることができる。

(6)資料（写真・地図・図表等）の選択とメッセージ（効果）の理解

ノンフィクションでは，文章に合わせて資料(写真・地図・図表等）が非言語的な情報を発信している。この非言語的情報によってノンフィクションの説得力は高まり，子ども達の内容への関心も一層強くなる。資料がどのような意図で選択され，どのようなメッセージ（効果）を持っているのかを考えさせることで，言葉と資料・メディアの組み合わせによる効果的なコミュニケーション・プレゼンテーション能力の方法について指導することができる。

(7)五段階の学習過程

(1)～(6)の「学び方・評価」のポイントを基礎・基本としてふまえ，さらに子ども達の個性的な発信・交流・評価活動に結びつけるために「五段階の学習過程」を構想する。「導入・基礎技術」「基本学習」「応用・個性化学習」「発信・交流学習」「評価・一般化学習」の「五段階の学習過程」は，次のような特色があり，ノンフィクション教材を「生きる力」の育成につなげる「学び方」の重要なポイントとなる（文献10，12参照)。

①従来の「導入・展開・まとめ」という三～四段階の学習過程では，「基本学習」で身につけた言語技術が，“豊かな”発信・交流活動に効果的に結びつかない。つまり，学習の成果が一つの教材にしか生かされなかったり，逆に教材から離れ，活動がどんどん拡散していってしまうといった問題を抱えている。こうした問題を「五段階の学習過程」は克服している。

②「五段階の学習過程」では基礎・基本の定着を重視しながら，しかも楽しくシンプルな形で教材の“正確な”理解を行なうことを提案しており，従来の読解中心型の指導方法を克服している。

③「基本学習」から「発信・交流学習」へとつなぐステップとして「応用・個性化学習」を設定している。このステップを入れることによって，基礎・基本を確実にふまえた発信・交流活動が可能となり，子ども中心の活動という活動主義の学習や思いつきだけの表面的な活動に陥らない。

④「総合的な学習の時間」への展望も含めた構想となっており，教科固有の学習と「総合的な学習の時間」との連携のあり方が段階的であり，効果的に「生きる力」の育成につながる。

以上，ノンフィクションの「学び方・評価」のポイントを７点述べた。ノンフィクション教材は「時代の常識的な価値観」に対する批評性をもっていたり，説明文・文学教材学習の基本をふまえた高度な表現方法の技術が駆使されているため，説明文や文学教材学習の「応用・発展的学習」と位置づけることが重要である。子どもの発達段階に応じた指導方法の工夫が必要ではあるが，小学校高学年から中学・高校生の国語学力育成に適した教材といえよう。

5　事実・生き方の記録（ノンフィクション）の授業実践例
―星野道夫「アラスカとの出会い」を例に―

本稿で取り上げる教材「アラスカとの出会い」（光村図書，中学３年生）は，『母の友』（福音館書店）1993年10月号に「あらすかものがたり⑦」として発表された。『旅をする木』（文藝春秋　単行本1995年８月，文庫本1999年３月）の中の一編として収録されている。

この作品のテーマとして以下の３点が挙げられる。

(1)星野道夫の「生き方」「感じ方・考え方」

たった一枚の写真を見て，見知らぬ人々が自分の知らない人生を送っている不思議さやその人々と出会えない悲しさを感じる感性，自分の関心をあこがれで終わらせず行動に起こして思いを実現させる実行力，アラスカの地で自分の一生を過ごそうと覚悟を決める決断力等，星野道夫の「生き方」「感じ方・考え方」は個性的なメッセージ(批評性)を持っている。自分にとって関心があることに正面から向き合い，それをしっかりと実現させていった星野道夫の「生き方」は，これから自分らしい「生き方」を模索していこうとする子ども達にとって一つのモデルとなる。

(2)星野道夫の「人生観」

星野道夫は，これまでの人生をふりかえりながら，人生は「無数の偶然」の連続であり，その「偶然」によって自分の人生が動いていったのも事実なのだと語る。人生は「無数の偶然」で動いていくからこそ不思議であり，おもしろいのだ(「人生はからくりに満ちている」）というメッセージである。

また，「あのとき，あのとき…」と考えても，過去に戻ってそれを修正することはできない，それよりも確かに今「あのとき」の偶然によってここにいる自分の存在を受け入れてこれからを生きてゆきたいという星

野道夫の人生に対する姿勢を読み取ることもできる。

(3)「出会い」について考える

一枚の写真との「出会い」，人と人との「出会い」はやはり一つの偶然であるが，そうした「出会い」が自分の人生を変えることもある。「無数の人々と擦れ違いながら，わたしたちは出会うことがない」という言葉から分かるように，「出会い」はそれほど不思議で意味のあるできごとであるというメッセージである。

このメッセージをうけて，子ども達自身にも，今の自分につながるような「出会い」がこれまでになかったかを考えさせたい。

6　学習目標と評価基準

―到達目標を明確にした授業づくりの提案―

(1)学習目標

①事実・生き方の記録（ノンフィクション）を読む楽しさに気づかせる。

②事実・生き方の記録（ノンフィクション）を“正確に”“豊かに”理解させる。

③事実・生き方の記録（ノンフィクション）を自分自身の経験や現実と結びつけ，これからの生き方や複雑な現代社会のとらえ方，批評の仕方について考えさせる。

(2)評価基準のポイント―自己学習力につながる「学び方・評価」リテラシーを育てる―

以下の6点がノンフィクションの「学び方・評価」のポイントである。①～④の項目が“正確な”理解，③～⑥が“豊かな”理解のポイントとなる。

①筆者の立場の理解

②時代の常識的な価値観の理解

③現代へのメッセージ（批評性）の理解

④エピソードの選択と場面構成の理解

⑤表現方法の特色の理解

⑥資料（写真・地図・図表等）の選択とメッセージ（効果）の理解

7　教材の特質と生かし方

(1)エピソードの選択と場面構成

Ⅰ．状況設定

1場面　形式①～③「ジョージ・モーブリイと一冊の写真集」

Ⅱ．展開1

2場面　形式④「十代のころのあこがれ」

3場面　形式⑤～⑩「一冊のアラスカの写真集との出会い」

4場面　形式⑪～⑭「アラスカへの手紙」

5場面　形式⑮～⑯「はじめてのアラスカへの旅」

Ⅲ．展開2

6場面　形式⑰～⑱「その後の進路・アラスカでの生活」

7場面　形式⑲～⑳「無数の偶然と人生」

Ⅳ．クライマックス

8場面　形式㉑～㉓「ジョージ・モーブリイとの対面」

Ⅴ．エピローグ

9場面　形式㉔「からくりに満ちた人生」

(2)表現方法の特色

①記録の文体

星野道夫の人生（事実）が年代順に記録されているため，年齢を軸に事実を読み取っていくとわかりやすい。また，一冊・一枚・半年・七年ぶりといった数字のもつ固有性にこだわる意味を丁寧に確認する。

②詩的な描写

一枚の写真に対する思いやはじめてアラスカの地を目にしたときの思い（心理描写），人生（「無数の偶然」「出会い」）についてのメッセージ等は，詩的で抒情的な描写で語られている。

③語りの文体

ジョージ・モーブリイと出会うという事件と過去の回想とが切々とした語りによって表現されている。単に自伝だけを語っているのではなく，現在のある「事件」を意味づけるエピソードとして過去のできごとが語られており，このような巧みな構成によって劇的な緊張感も感じられる文体となっている。

(3)資料の選択とメッセージ（効果）

教科書に掲載されている写真には，文章の内容を理解する助けとなる写真と，星野道夫やアラスカの自然の魅力をさらに詳しく伝えている写真とがある。いずれもキャプションが付されており，写真の意図は理解しやすい。地図も掲載されており，「シシュマレフ村」や「グレイシャーベイ」の位置を確認できるが，距離感や大陸の大きさ等をつかむために，別に世界地図を用意するとより効果的である。

(4)「アラスカとの出会い」の「学び方・評価」のポイント

―到達目標からみた教材の生かし方のポイント―

①筆者の立場を理解する。　　**→「情報」の発見**

②筆者が発信している現代へのメッセージ（批評性）について，時代の常識的な価値観と比較しながら理解する。　　**→「情報」の正確な理解**

③教材「アラスカとの出会い」の場面構成とエピソードの選択の仕方，また表現方法の特色について理解する。　　**→「情報」の正確な・豊かな理解**

④資料（写真・地図）の選択の仕方とそのメッセージ（効果）を理解する。

→資料選択の意図とその効果の理解

⑤「情報」（星野道夫のメッセージ）を理解し，選択して「情報」から自分が考えたことを発表原稿に記述する。

→「情報」の論理的な構成と思考力・日常生活

の再発見

⑥話し方に気をつけたり，聞き手の反応を確かめたりしながら楽しく発表する。

→「情報」発信の基本と個性化・プレゼンテーションの能力

⑦自分や友達の発表の内容・話し方について評価する。　**→「情報」発信・交流の評価能力**

8　学習計画（7時間完了）

……（資料1を参照）

9　到達目標（評価基準）を明確にした授業展開のポイント

(1)導入・基礎技術（1時間）

導入には，「筆者の立場」を理解するための簡単な**資料「星野道夫について」（資料，省略）**を用意する。「プロフィール（経歴）」「主な著作」の確認，写真集の紹介等で学習内容に対する関心を高める。

教材文を読んだ後，**学習シート1（資料2）**で「場面構成」と「エピソードの選択の仕方」を理解する。場面（エピソード）の内容をキーワードの記入によりシンプルに確認させる。1・8場面が「ジョージ・モーブリイとの出会い」のエピソード（現在），2～6場面が「アラスカとの出会い」のエピソード（過去～現在）とで構成されていることをおさえる。また，「十九歳」を軸にして年月を表す数字（「半年もたったある日」「七年ぶりに」「十四年が過ぎていた」等）をもとに計算すると場面ごとの年齢が特定できる。さらに，星野道夫の略歴を簡単にまとめさせることで“正確な”内容の把握ができる。

(2)基本学習（2時間）

学習シート2（資料3）で，場面ごとのエピソードにおける，事実の確認とその意味について理解させる。

3場面は，星野道夫にとって「どうしても気になる一枚の写真」とはどんな写真だったのか，その写真を見たときに筆者はどんな気持ちになったのかをおさえる。星野道夫の独特の感性を理解するためにも，まずどんな写真だったのか（写真の内容），写真の何に引きつけられたのかを正確に理解しておく必要がある。「写真」のイメージがしにくい場合は『アラスカたんけん記』（星野道夫　文・写真　福音館書店　1990年2月）が参考になる（「気になる一枚の写真」とアラスカからの手紙の写真が掲載されているため）。心理描写は詩的で抒情的な表現（「詩的な描写」）となっており，子ども達自身に自分の経験をふりかえらせながら独特の感性を理解させたい。

4場面については，アラスカに出した手紙の文面を，日本語でよいので再現させてみるとよい。「シシュマレフ村　アラスカ　アメリカ」という，これだけの素朴な住所でよく実際に届いたものだという驚きを確認したい。拙くても精一杯の思いを込めて書かれたこの手紙は，星野道夫の「実行力」や「夢を実現させようとする強い意志」を象徴している。

5場面は，はじめてアラスカの地に訪れた時の心理描写（「詩的な描写」），数々のアラスカでの体験（「記録の文体」）を確認する。

6場面は，その後の進路とアラスカでの生活を確認する。特に「家を建て，この土地に根を下ろそうとしている」とは，この土地で一生過ごそうという決意や覚悟を意味していることをおさえる。

8場面では，ジョージ・モーブリイの人間像を，星野道夫の目を通して描かれる会話や行動等の描写によって理解させる。1場面で一般的な人物像（アメリカで最も権威のある雑誌社のカメラマン）が確認できるが，星野道夫と出会う8場面でわかる彼の人物像が大切である。優しく穏やかで，人生の深みを感じさせてくれるような人物として描かれている。

次に**学習シート3（資料4）**で「星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）」を読み取らせる。この教材からは，主に三つのメッセージを読み取らせる。

まず3場面では，たった一枚の写真から，見知らぬ人々が自分の知らない人生を送っている不思議さ，その人々と出会えない悲しさを感じている，星野道夫の独特の感性を読み取ることができる。子ども達自身に，もし自分がこの写真を見たとしたら何を感じるだろうかと考えさせ，そうした「常識的な価値観」と比較させながら星野道夫の感性の豊かさを理解させたい。自分の世界のとらえ方・感じ方の再発見にもつながる。

7場面では，星野道夫の人生観を読み取ることができる。このメッセージは，これまでの自分の人生をふりかえることで経験的にも理解できる。「かぎりなく無数の偶然が続いてゆくだけ」という人生のとらえ方は，決して自分の人生に対して無責任になることではない。自分のこれまでの足取りを確認し，人生の不思議さを実感しながらも，自分の存在をしっかりと受け入れてこれからも生きていこうとしている星野道夫の姿勢を読み取らせる。

9場面は「出会い」の不思議さや意味の深さについて考えさせる。このメッセージもやはり，子ども達自身の経験をふまえて理解させる。

基本学習のまとめとして，作品全体についての感想や意見をもたせる。また写真集から写真を紹介し，写真を見て感じたこと・考えたこと等を書かせる。

(3)応用・個性化学習（2時間）

資料「筆者・星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）を読んでみよう」（資料5）は，星野道夫の感性・発想（感じ方・考え方）の特色がよく表われている部分を，著作の中から抜粋して集めたものである。筆者が繰り返し述べていることや，子ども達が関心をもつ内容を選び，負担がかからない文章量で抜粋した。

資料1　学習計画の全体像（中学3年・7時間完了）

段階	時	主な学習活動	評価の観点と指導・支援
導入・基礎技術	1	1　資料「星野道夫について」を読む。 2　範読による全文通読 3　学習シート1を使用し、場面構成とエピソードの選択の仕方を理解する。 4　教材文の内容をもとに、星野道夫の略歴をまとめる。	1〈支〉筆者・星野道夫について、「プロフィール」と「主な著作」をまとめた資料を用意する。写真集の作品を何枚か紹介する。 2〈支〉場面ごと(形式・意味)に番号をつけさせ、文章を場面単位で読ませる。 3〈支〉 (1)エピソードの内容を、キーワードの記入により確認させる。 (2)場面ごとに、時間(現在・過去)と筆者の年齢を確認させる。 4〈支〉「約半年」「七年ぶり」「十四年」などの年月を表す数字から、筆者の年齢を計算させる。 〈評〉筆者の立場について理解することができたか。 〈評〉場面構成とエピソードの選択の仕方について理解することができたか。
基本学習	2	1　学習シート2を使用し、場面ごとに詳しく読み取る。 (1)「どうしても気になる一枚の写真」(3場面)について読み取る。 (2)アラスカへの手紙とその返事(4場面)について読み取る。 (3)はじめてのアラスカへの旅(5場面)について読み取る。 (4)その後の進路・アラスカでの生活(6場面)について読み取る。 (5)ジョージ・モープリィの人間像(8場面)について読み取る。	1〈支〉 (1)写真の内容と、その写真を見たときの筆者の気持ちについて確認させる。 (2)アラスカに出した手紙の内容やその行動の意味、返事が半年後に届いたことやその意味について確認させる。 (3)写真で見続けた風景を、現実に見た時の筆者の気持ちや、アラスカでの体験について確認させる。 (4)写真家となって七年ぶりにアラスカに戻ってきたことや、アラスカでの生活について確認させる。 (5)ジョージ・モープリィの人間像と、星野道夫の感動について確認させる。 〈評〉場面ごとに、エピソードの内容や意味について理解することができたか。
	3	2　学習シート3を使用し、星野道夫のメッセージ(感じ方・考え方)を読み取る。 (1)3場面のメッセージを読み取る。 (2)7場面のメッセージを読み取る。 (3)9場面のメッセージを読み取る。 3　「アラスカとの出会い」を読んでの感想や、星野道夫が撮った写真を見て感じたこと・考えたことを書く。	2〈支〉 (1)星野道夫の写真の見方・感じ方を理解させる。 (2)星野道夫の人生観について理解させる。 (3)星野道夫の「出会い」についての考え方を理解させる。自分自身の「出会い」の経験についてふりかえらせる。 3〈支〉作品全体について自分の感想や意見をもたせる。写真集から作品をいくつか紹介する。 〈評〉星野道夫のメッセージ(感じ方・考え方)を理解することができたか。 〈評〉作品全体や写真について、自分の感想や意見をもつことができたか。
応用・個性化学習	4 5	1　資料「筆者・星野道夫のメッセージ(感じ方・考え方)を読んでみよう」を読む。 2　学習シート4を使用し、心に残ったメッセージを2つ選んで、そのメッセージから考えたことを書く。	1〈支〉 (1)星野道夫のメッセージ(感性・発想の特色)を6つ、著作から抜粋して紹介する。 (2)大切だと思った部分に線を引かせる。 2〈支〉論理的な「報告・レポート」の書き方の基本を確認する。 (1)「はじめ」「なか1」「なか2」「まとめ」の構成で書かせる。 (2)「はじめ」には、選んだメッセージの内容を書かせる。 (3)「なか1」「なか2」には選んだ理由や、メッセージから自分の感じたこと・考えたことなどを書かせる。 (4)「まとめ」には、自分の生き方や感じ方・考え方などについて考えたことを書かせる。 〈評〉心に残ったメッセージを選び、メッセージを読んで感じたことや考えたことを書くことができたか。 〈評〉自分の生き方や感じ方・考え方などについて、考えたことを「まとめ」に書くことができたか。
発信・交流学習	6 7	1　学習シート5を使用し、わかりやすい発表をするためのポイントを理解する。 2　発表の練習をする。 3　発表原稿をもとに発表会を行なう。 4　お互いの発表を聞いて、意見や感想をもち発表する。	1〈支〉発表の内容・話し方・聞き方についての具体的な評価の観点を示し、それを意識しながら発表に取り組ませる。 2〈支〉話し方の3つのポイント(学習シート5)を意識させて練習させる。 3〈支〉 (1)自分のスピーチについて自己評価させる。 (2)関心を持った友達の発表について、感想や意見を書かせる。 4〈支〉感想や意見を交流させ、メッセージの理解や自分の考えを深めさせる。 〈評〉学習シート5の観点に沿って、自己評価や相互評価をすることができたか。
評価・一般化学習		1　学習全体を通してわかったことや考えたことについて発表する。 2　星野道夫の他の著作を知る。	1〈支〉学習を通して学んだことを明確にし、一般化する。 2〈支〉写真集やエッセイ集、他の著者によるノンフィクションを紹介し、読書の意欲を喚起する。 〈評〉学習を通して学んだことを明確にし、今後の学習や生活の中で生かそうとする姿勢がもてたか。

資料２　導入・基礎技術―学習シート１（場面構成とエピソードの選択の仕方の理解）

「アラスカとの出会い」　星野道夫　　３年（　）組　氏名（　　）

１　場面構成とエピソードの選択の仕方を理解しましょう。

構成	場面	内容（エピソード）	時間	筆者の年齢
状況設定 1	③-⑪	ジョージ・モープリイと一番の（写真集）の写真集との出会い	現在	（四十）歳
2	④	十代のころのあこがれ	過去	十代のころ
展開１ 3	⑨-⑤	一冊の（アラスカ）の写真集との出会い	（過去）	十代のころ
4	⑭-⑪	アラスカへの（手紙）	（過去）	（十八）歳
5	⑮⑮	はじめてのアラスカへの旅	（過去）	（十九）歳の夏
展開２ 6	⑱⑰	その後の道路・アラスカでの生活	過去～現在	二十代～現在（四十）歳
7	⑳⑲	無数の（偶然）と人生		
クライマックス 8	㉓-㉑	ジョージ・モープリイとの対面	（現在）（１場面の続き）	（四十）歳
エピローグ 9	㉔	（からくり）に満ちた人生		

２　「アラスカとの出会い」をもとに、星野道夫の略歴をまとめましょう。

十代のころ

（北海道）の自然に強くひかれていた。

北方へのあこがれは、いっしかさらに遠い（アラスカ）へと移る。――２場面

東京、神田の古本屋街の洋書専門店で、一番のアラスカの（写真集）を見つける。

その中の、北極圏のあるイヌイットの村を空から撮った一枚の写真が、どうしても気になる。

――（３）場面

十八歳の夏（約半年）

シシュマレフ村に（手紙を送る）。――４場面

十八歳の冬（約半年）　1970

シシュマレフ村のある家族から手紙が届く。――４場面

十九歳の夏　1971

（シシュマレフ村）で三か月過ごす。――（５）場面

二十代初め

写真という仕事を選ぶ。――６場面

二十六歳（十四年）　1978

（七）年ぶりにアラスカへ行く。――６場面

四十歳　1992

アラスカに家を建て、この地に根を下ろそうとしている。――６場面

現在

（ジョージ・モープリイ）に出会う。――（７）・（８）場面

資料３　基本学習―学習シート２（エピソードの選択の仕方・表現方法の特色・資料の選択とメッセージの理解）

「アラスカとの出会い」　星野道夫　　３年（　）組　氏名（　　）

１　「どうしても気になる一枚の写真」（P233 L15）【３場面】

(1)その写真は、

北極圏のあるイヌイットの村を空から撮った写真

それは、実に（荒涼とした）風景だった。（人影）はないが、一つ一つの（家）の形がはっきりと見える。

(2)星野道夫はその写真の何にひきつけられたのか。

①初めは、その写真のもつ（光）の不思議さ。

②そのうちに、だんだんその（村）が気にかかり始めていった。

(3)その写真を見たときの気持ち

①なぜ、こんな（地の果て）のような場所に（人）が暮らさなければならないのか。

②いったい（どんな人々）が、（何を考えて）生きているのだろう。

③「その集落の写真を見たときの気持ちは、それに似ていた。」（P236 L1・2）の「それ」とは…

電車から、ふっと家族の団欒が目に入ったときに込み上げてきた（胸が締めつけられるような思い）のこと。

④「胸が締めつけられるような思い」について、それはいったいなんだったのか、星野道夫自身が考えている部分に線を引きましょう。

２　アラスカへの手紙とその返事【４場面】

(1)初めて書いた英語の手紙　※地図で確認

【住所】シシュマレフ、アラスカ、アメリカ

【宛名】村長

【内容】あなたの村の写真を本で見ました。訪ねてみたいと思っています。なんでもしますので、だれか僕を世話してくれる人はいないでしょうか。

つたないけれど精一杯の思いを込めて書かれたこの手紙は、星野道夫の積極性・実行力を象徴している。

(2)アラスカからの返事

半年後に　シシュマレフ村　のある家族から届く。

３　はじめてのアラスカへの旅（写真P237）【５場面】

(1)本で見続けた写真の風景を、現実に見たときの星野道夫の気持ちを想像して書いてみましょう。

夢見続けていたものが現実になった感動と、本当に大丈夫なのかという不安。不思議な気持ち。

(2)アラスカでの体験

①はじめてのアラスカの地で体験したことが書かれている部分に線を引きましょう。

②（強烈な体験）として心の中に沈殿していった。

③この旅を通し、（人の暮らしの多様性）にひかれていった。

４　その後の道路・アラスカでの生活【６場面】

①

写真　という仕事を選び、七　年ぶりにアラスカ　に戻ってくる。

②アラスカでの生活について具体的に書かれている部分を四角で囲みましょう。

③「家を建て、この土地に根を下ろそうとしている」とは、旅ではなくここで一生過ごすこと　を意味している。

５　ジョージ・モープリイの人間像【８場面】

①ジョージ・モープリイは星野道夫にとって人生の大きな　きっかけ　を与えてくれた人物

②初めて対面したその人は（人物像のイメージ）

優しい人、おだやかな人

であった。星野道夫の喜び、感動がそのことによってよりいっそう深まっている。

資料4　基本学習―学習シート3（時代の常識的な価値観・現代へのメッセージ（批評性）の理解）

「アラスカとの出会い」　星野道夫　　3年（　）組　氏名（　　）

☆ 星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）を読み取りましょう。

1　【3場面】のメッセージ

(1) 十代のころ、星野道夫は一枚のアラスカの写真を見て、どんなことを考えたり感じたりしていますか。

なぜ、こんな地の果てのような場所に人が暮らさなければならないのか。いったいどんな人々が、何を考えて生きているのだろう。知らない人生を送っている不思議さ。

(2) もし自分だったら、そのような写真を見たとき、どんなことを思うでしょうか。星野道夫の写真の見方や世界のとらえ方について、どんなことを感じましたか。

世界には、こんな国がある人だなぁ、日本とは全く違うけど、この世界の中には、こんなところもあるのか　と考えるだろうが、星野さんのように興味を持たないだろう。

2　【7場面】のメッセージ

(1) 星野道夫は自分の人生をふりかえりながら、「人生」についてどんなことを考えていますか。

人生は無数の偶然でできている。その偶然によって自分の人生が動いていった。

(2) 星野道夫の人生観について考えたこと。気づいたこと。

自分も、このクラスになったのは偶然なのだろう。だけど、その偶然によって、たくさんの友達と出会えたことも事実なんだ。

3　【9場面】のメッセージ

(1) 星野道夫は「出会い」についてどのように考えていますか。

「日々の暮らしの中で、無数の人々と擦れ違いながら、わたしたちは出会うことがない。」（P241 L8）という文章から考えてみましょう。

出会いはその人に興味をもつことによって初めて出会うことになる。

(2) 星野道夫は、人との（出会い）や今の自分の存在につながる様々なきっかけ、無数の（偶然）などを指して「（人生はからくりに満ちている）」と述べている。

(3) 自分自身の「出会い」の経験の中で「人と人とが出会う限りない不思議さ」を感じたことはなかったか、ふりかえってみましょう。

♪「アラスカとの出会い」を読んでの感想や、星野道夫が撮った写真を見て感じたこと・考えたことを書いてみましょう。

どれもたくさんの人と動物に出会ったことから撮った写真である。その写真には、やさしさや美しさ、ときにはむごさがあり、その写真に写されたものに対する星野さんの気持ちが表現されていると思う。だからくまを星野さんが撮ればやさしさかもしれないし、他の人が撮れば恐ろしさが表現されるかもしれない。

資料5　応用・個性化学習―資料「筆者・星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）を読んでみよう」（時代の常識的な価値観・現代へのメッセージ（批評性）の理解）

筆者・星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）を読んでみよう　　3年（　）組　氏名（　　）

☆ 星野道夫は独特の感性をもって自然をとらえ、それを写真や言葉で表現し、私たちに様々なメッセージを送っています。彼の自然観や人生観、また独特の発想や感じ方、考え方の特色がよく現れている部分を抜き出してみました。

1 ・もうひとつの時間　―世界とのつながり―

やがてぼくは北極圏の自然に強く魅かれていった。その当時、北海道は自分にとって遠い土地だった。多くの本を読みながら、いつしかひとつのことがどうしようもなく気にかかり始めていた。それはヒグマのことだった。大都会の東京で電車に揺られている時、雑踏の中で人込みにもまれている時、ふっと北極圏のヒグマが頭をかすめるのである。ぼくが東京で暮らしている同じ瞬間に、同じ日本でヒグマが日々を生き、呼吸をしている……確実にこの今、どこかの山で、一頭のヒグマが倒木を乗り越えながら力強く進んでいる……そのことがどうしても不思議でならなかった。考えてみればあたりまえのことなのだが、十代の少年には、そんなことがひっかかってくるのである。自然とは、世界とは、面白いものだなと思った。あの頃はその思いを言葉に変えることは出来なかったが、それはおそらく、すべてのものに平等に同じ時間が流れている不思議さだったのだろう。子どもながらに、知識としてではなく、感覚として世界を初めて意識したような気がする。

「もうひとつの時間」（『旅をする木』文藝春秋　一九九五・八）より

☆これまで「感覚として世界を初めて意識したような」経験はありませんか？筆者は東京の電車や雑踏の中で同じ瞬間に北極圏のヒグマのいのちを感じたのです。

2 ・太古からの時間の営み。――自然・世界の豊かさと時間――

・今おれたちが見ているのは、一千年、いや一万年前と何も変わらない世界なのさ

詩で揺揺するランのつぶやきが、マイクを通してヘッドフォンから聞こえてきた。

白夜のツンドラで、カリブーの群れを追う一頭のオオカミを思を詠めて一緒に見ていたこともあった。それもまた太古の昔と変わらない風景だった。人間のためでも誰のためでもなく、それ自身の存在のために息づく自然の気配に、ぼくたちはいつも心を動かされた。

「白夜」（『旅をする木』）より

☆今、目の前にある風景や自然には、それぞれにゆったりと時間が流れ、それぞれに歴史があるのです。

3 自分のいのち、人間の一生

二十代のはじめ、親友の山での遭難を通して、人間の一生がいかに短いものなのか、そしてある日突然断ち切られるものなのかをぼくは感じとった。私たちは、カレンダーや時計の針で刻まれた時間に生きているのではなく、もっと偶然として、脆い、それぞれの生命の時間を生きていることを教えてくれた。自分の持ち時間が限られていることを本当に理解した時、それは生きる大きなパワーに転化する可能性を秘めていた。その事故は、結局自分をもう一度アラスカの自然に向かわせるひとつのきっかけをつくってくれた。ぼくはその時、自然というものに本当に興味をもった。それもとてつもなく大きな自然に触れてみたいと思った。そこから何か大切なひとつの答が引き出せるような気がしていた。ぼくはきっとアラスカの壮大な自然から、ある力をもらいたかったのだろう。そんな思いがパットの気持ちと重なるような気がしてならなかった。

「ある家族の旅」（『旅をする木』）より

4 人生や歴史の偶然性

ぼくは時々こんな空想にとらわれる。もしアメリカ大陸にアングロサクソンがやって来なかったら……もしこの土地が世界と隔絶されたインディアンやエスキモーだけの世界として残ったら……彼らの歴史はやはりいつの日か今の私たちと同じような近代文明をつくりあげていったのだろうか。ただスピードの差こそあれ、人間の暮らしとは変わり続けてゆく宿命なのだろうか。歴史とは選択のないただ一回の出来事である。考えてもどうしようもないことなのに、近代と接する以前の、つまりわずか一～二世代前までの自然と調和した人々の暮らしを考えるほど、そんな想像をめぐらせてしまう。

「ピーパーの民」（『旅をする木』）より

5 想像の力

ルース氷河は、岩、氷、雪、星だけの、無機質な高山の世界である。あらゆる情報の海の中で暮らす日本の子どもたちにとって、それは全く逆の世界。しかし何もないかわりに、そこにはシーンとした宇宙の気配があった。氷河の上で過ごす夜の静けさ、風の冷たさ、星の輝き……情報が少ないということはある力を秘めている。それは人間に何かを想像する機会を与えてくれるからだ。

「ルース氷河」（『旅をする木』）より

6 現代社会に対する危機感

あと五年で二〇〇〇年を迎えようとしている今、私たちはすごい時代に生きているなあと思います。貧困の拡散、人口問題、環境汚染……ちょっと考えただけでもある無力感におそわれます。それは正しい答が見つからないからでしょうか。けれどもこんなふうにも思うのです。ひとつの正しい答などはじめから無いのだと……そう考えると少しホッとします。正しい答をださなくてもいいというのは、なぜかホッとするものです。

私たちは、千年後の地球や人類に責任をもてと言われても困ってしまいます。言葉の上では偉しいけれど、現実として、やはり過ぎるのです。けれどもこうは思います。千年後は無理かもしれないが、百年、二百年後の世界には責任があるのではないか。つまり、正しい答はわからないけれど、その時代の中で、より良い方向を出してゆく責任はあるのではないかということです。つまり、グッチン・インディアンの人びとも、私たちも、いつも旅をしている途上なのかもしれません。

「オールドクロウ」（『旅をする木』）より

♪星野道夫の著作の中には、次に挙げるような写真絵本もあります。ぜひ一度読んでみましょう。

『アラスカたんけん記』（福音館書店　一九九〇・二）
『森へ』（福音館書店　一九九六・九）
『ナヌークの贈りもの』（小学館　一九九六・一）
『クマよ』（福音館書店　一九九九・十）

はじめの二つのメッセージについてはコメントを添え，特に大切と思われる部分には傍線を引いた。残りのメッセージについても，同じように子ども達に傍線を引かせながら読み取らせる。

次に，**学習シート４（資料６）**を使って，心に残ったメッセージを二つ選ばせ，そのメッセージから考えたこと（自分の生き方や感じ方・考え方等）を書かせる。「情報」（メッセージ）から星野道夫の生き方や感じ方・考え方を学び，それを自分自身の生き方や感じ方・考え方を考える際のモデルとしてとらえさせる。

「はじめ」「なか１」「なか２」「まとめ」の構成で発表原稿を書かせる。「なか１」「なか２」に選んだ二つのメッセージそれぞれについて，選んだ理由や自分の感じたこと・考えたこと等を書かせる。「まとめ」には自分の生き方や感じ方・考え方等について考えたことを書かせる。

⑷発信・交流学習（1.5時間）

学習シート５（資料７）を使って，わかりやすい発表をするためのポイントを確認したあと，発表会を行なう。発表は自己評価の他，友達の発表についても意見や感想を書かせ発表させる。意見・感想の交流によって星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）についての理解を深め，また自分自身の生き方や感じ方・考え方についての考えを深めさせる。

⑸評価・一般化学習（0.5時間）

星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）から学んだこと等，学習全体をふりかえり学んだことを明確にして，次の学習やこれからの自分の生活の中で生かしていこうとする姿勢をもたせる（学びの一般化）。

星野道夫の写真集・写真絵本・エッセイ集等を紹介して読書の意欲を喚起させたり，他の著者による人間の「生き方」について書かれたノンフィクション等を紹介して，自分の生き方についてさらに深く考えさせる。

10　研究実践の考察

―新たな授業・評価システムの開発を―

⑴ノンフィクション教材の学習はなぜ必要か？

ノンフィクション教材には，複雑な現実の意味を正確に「理解」し，個性的に自分の生き方や感じ方・考え方を「発信」した人間の姿が描かれている。正確な理解を通して，人物（筆者）の生き方や事実の感じ方・考え方を学び，それを自分自身の生き方や感じ方・考え方を考える際のモデルとして生かすことができる。

また，ノンフィクション教材は筆者が現実の中から〈情報〉を正確に「理解」し，それを個性的に「収集・選択判断・構成・発信」したものである。そのため，子ども達自身が自分の立場で〈情報〉を「理解」し，「収集・選択判断・構成・発信」していく，そうした一連の“情報リテラシー”育成のためのモデルとして教材をとらえることもできる。

⑵「到達目標」を明確にした授業づくりが必要

「感動的な教材を読ませたい」「楽しく活動できればよい」「子ども達が主体的に学び，課題を追究すればよい」といった漠然とした発想では，限られた授業時間数の中で「公教育」に求められている学力保障の責任は果たせない。学習者の学びを正しく診断・チェックし，授業改善に生かすことのできる「到達目標」を明確にした授業づくりが必要である。

国語科で育てるべき「言語能力」を到達目標に据えることで，そして「言語能力」を段階的な「学びの過程」としての「言語技術」として整理することによって，言語教育としての国語科の役割や学校教育での位置が鮮明になる（文献10を参照）。

⑶「五段階の学習過程」

従来の「導入・展開・まとめ」という三～四段階の学習過程では，学習の成果が一つの教材のみにしか生かされなかったり，逆に教材から離れ，活動がどんどん拡散していってしまうといった問題を抱えている。

「五段階の学習過程」では基礎・基本の定着を重視しながら，従来の読解・要約中心型の指導方法や，「活動あって学習なし」と言われる活動主義の学習を克服している。「基本学習」から「発信・交流学習」へとつなぐステップとして「応用・個性化学習」を設定しており，このステップを入れることによって，基礎・基本を確実にふまえた豊かな発信・交流活動が可能となる。

⑷学習シートの開発と生かし方

どんなことがどのようにできることが「到達目標」を達成したことになるのか，子ども達に目に見えるように明示することが重要である。そのためには新しい視点からの学習シートの開発と活用が求められる。

学習シートを使うことによって，教材をシンプルに楽しく理解することができ，かつ到達目標に達するまでの「学び方」やステップが学習者にとって明確となる。

⑸生徒の“学び”の実際と意味

―資料４における感想や自分の考えから（一部）―

①人との出会いについて，ここまで考えたことがなかったから，今回これを読んで今までにどれだけの人々に助けられ，生きてきたのか考えた。これからもこの心を忘れずに，また新しい人々と出会うことを楽しみにしていきたい。

〔人生の出会いの意味の再考〕

②先日本屋に行き，たまたま星野さんの写真集を見た。どの写真も生き生きとしていて，親しみがわくような感動するものばかりだった。きっと，その写真は星野さんの命をかけた行動と独自の考え方から生まれたものだと思った。今回，初めて「星野さん」を知ったが，考え方は，「確かにそうだ」と共感する

資料6　応用・個性化学習―学習シート4（メッセージを理解し，考えたことの発表原稿）

星野道夫のメッセージ（感じ方・考え方）を読んで

（　）組　氏名（　　）

星野道夫のメッセージを、六つのテーマから読んでみました。みなさんはどのようなことを感じたり、考えたりしましたか？「アラスカとの出会い」を含め、これまでに読んだ星野道夫のメッセージの中から心に残ったものを二つ選んで、そのメッセージから考えたこと（自分の生き方や感じ方・考え方など）を書いてみましょう。

まとめ				なか2								なか1								はじめ			
自分の生き方や感じ方などについて考えたこと。				抜き出した部分に「をつけましょう。								抜き現を抜き出して書いてもかまいません。								選んだ理由や自分の感じたことや考えたことなど。			
メ	い	を	┐	た	└	い	の	い	れ	え	┐	た	感	た	触	の	よ	子	私		し	｜	┐
ッ	き	持	も	い	と	う	な	て	て	の	偶	い	覚	。	れ	よ	う	は	が		た	└	“
セ	た	ち	う	と	い	こ	い	い	忙	こ	然	の	な	こ	た	う	に	怒	笑		。	と	も
ー	い	、	ひ	思	う	と	偶	る	し	と	└	で	の	の	み	に	猫	っ	っ			┐	う
ジ	。	┐	と	う	こ	を	然	親	い	に	と	は	だ	気	た	連	も	て	て			“	ひ
か	ス	偶	つ	こ	と	忘	に	た	日	す	い	な	と	持	い	想	自	い	い			人	と
ら	ケ	然	の	と	を	れ	よ	ち	々	ぎ	う	い	い	ち	に	し	分	る	る			生	つ
何	ー	└	時	が	意	が	っ	に	を	な	こ	の	う	が	素	て	の	。	の			や	の
か	ル	と	間	私	識	ち	て	は	送	い	と	だ	こ	大	直	い	時	身	と			歴	時
温	の	い	└	た	し	だ	築	あ	る	。	は	ろ	と	切	な	く	間	ぢ	同			史	間
か	大	う	と	ち	て	。	き	ら	私	け	考	う	を	で	気	と	を	か	じ			の	”
い	き	時	い	に	こ	だ	上	ゆ	た	れ	え	か	星	、	持	、	持	で	瞬			偶	ー
も	い	間	う	は	の	か	げ	る	ち	ど	て	。	野	忘	ち	何	ら	は	間			然	世
の	星	を	広	必	時	ら	ら	物	、	も	み		道	れ	に	か	生	、	に			性	界
が	野	大	い	要	間	こ	れ	事	夜	、	れ		夫	て	な	新	き	私	、			”	と
伝	道	切	視	だ	を	そ	た	が	遅	勉	ば		さ	ほ	っ	し	て	た	外			└	の
わ	夫	に	野	ろ	大		も	か	く	強	あ		ん	し	て	い	い	ら	国			を	っ
っ	さ	歩	の	う	切	┐	の	け	ま	に	た		は	く	し	こ	る	と	の			選	な
た	ん	ん	感	。	に	偶	だ	が	で	追	り		伝	な	ま	と	。	同	あ			び	が
。	の	で	覚		し	然	と	え	働	わ	ま		え	い	っ	に	こ	じ	る			ま	り

資料7　発信・交流・評価学習―学習シート5（発表の自己・相互評価）

☆メッセージを読んで考えたことを発表しましょう。

3年（　）組　氏名（　　）

1　自分の発表の内容・話し方、そして聞き方について、◎・◎・○で自己評価をしましょう。

聞き方			話し方			内容	
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
気づいたことはメモをとりながら聞くことができた。	友達の発表の内容について、意見や感想をもつことができた。	発表する友達を見ながら話を聞くことができた。	決められた時間を守って話すことができた。	聞き手の反応を見ながら、声の大きさや速さ、間の取り方、抑揚などを工夫して話すことができた。	話しているときの表情や視線、姿勢に気をつけて話すことができた。	「まとめ」では、自分の生き方や感じ方などについて考えたことを書くことができた。	メッセージの内容を理解し、選んだ理由や感じたこと・考えたことなどを書くことができた。
○	◎	◎	○	◎	○	◎	◎

2　友達の発表を聞いて自分の意見や感想をもち、発表しましょう。

さん						
「星野さんは現代社会を批判してる」というところがよかった。	自分の経験を交じえて偶然ってすごいっていうところがわかりやすかった。	声の大きさが聞きとりやすかった。		私自身の生命の時間を意識して一生を全うしたいというところがいい！。	話している時の表情がよかった。	

♪メモ欄

ところが多かった。

〔読書力への展開と生き方・考え方への共感〕

③星野さんはとても人とのつながりを大切にする人だと思った。私はこれほど“人との出会い”について考えたことがなかったので，いろいろ考えさせられて良かったと思う。写真も見たことがない場面ばかりですごいなと思ったし，自分の好きなこと一つだけに，これほど一生懸命になれるのは，ちょっとうらやましいとさえ思った。

〔よりよい人間関係の構築，自己実現への意欲〕

④「アラスカとの出会い」を読んで偶然は不思議だなと思ったし，アラスカに行きたいと思うだけではなくて実際に行ったのは強い気持ちがあったんだなと思った。星野さんの写真は動物や自然界の表情が表われていて引きつけられるようだった。自然界のきびしさや美しさを撮っていてすごいなと思った。

〔人生を生きる強い意志，自然の再発見〕

⑤たった一冊の本によって，ここまで人の人生が動くんだという驚きが一番の感想です。私だったらきっと，写真と同じ場所に住むことまではしないと思うから。確かに，星野さんの言う通り，「人生はからくりに満ちている」と思う。だけど，たった一冊の本に魅せられ，写真という仕事を選び，アラスカという地に住んでしまった星野さんの行動力に私はとても感動した。

〔国語学習における感動体験と学力〕

⑥確かに人生は偶然でできあがるものだと思う。良い偶然も悪い偶然もあるが，それを全部受け止め，自分なりの人生にしたい。

〔自分の人生を生きる，創ることの意味〕

⑦自分も人生をふりかえってみるとその通りだと思った。そのときには何気なくしたことでもそれが大きな意味を持っていたりして，そんなふうに人生を生きてきたんだなあと思った。

〔自分の問題としてとらえることの大切さ〕

⑧最後の「無数の人々と擦れ違いながら，わたしたちは出会うことがない」にすごく共感した。電車とか，スーパーとか，旅行先とかでいろいろな人を見るのに出会うことはまずない。今，私が出会った人々は何億分の確率で出会った人達なのですごい偶然だなとつくづく思った。

〔偶然を生きることの大切さ〕

おわりに

本稿は，新しい言語教育を担う国語科教材開発の一つの可能性として，これまで十分に研究・実践がなされてこなかった伝記・記録等の，いわゆる「ノンフィクション教材」の位置と今日的な教育的可能性に注目し，ノンフィクション教材の意義や指導方法について考察したものである。

特に，二十一世紀を生きていく子ども達に求められる“情報リテラシー”を育成する立場から，ノンフィクション教材を〈情報の一つのモデル〉としてとらえる指導方法を提案したこと，またノンフィクション教材の「学び方・評価」の言語技術を提案したこと，「到達目標（評価基準）」の明確な学習過程を構成したこと等が，これまでの研究にない本稿の新しい問題提起であると考えている。

なお，本稿は第66回国語教育全国大会（日本国語教育学会）校種別分科会，中学校３・読む分科会（2003年８月12日，青山学院大学）における研究発表を骨子としている。まとめるにあたっては星野道夫の中学校教材を例に，ノンフィクション教材の授業開発と評価論について，特に国語学力の基礎・基本から発展的学力・発展学力等の育成を実践的に，段階的に提案することに重点を置いた。そのため，伝記・記録・報告・ルポルタージュ等の国語科教材の現状，授業上の混乱，歴史的検討等については詳細に論じることができなかった。これ等については別稿で報告したい。

〈主な参考文献〉

1　星野道夫『アラスカたんけん記』（福音館書店　1990．2）
2　星野道夫『アラスカ光と風』（福音館書店　1995．5）
3　星野道夫『旅をする木』（文藝春秋　1995．8）
4　星野道夫『アラスカ風のような物語』（小学館文庫　1999．1）
5　星野道夫『星野道夫の仕事４－ワタリガラスの神話』（朝日新聞社　1999．4）
6　篠田一士『ノンフィクションの言語』（集英社　1985．5）
7　本多勝一『事実とは何か』（朝日文庫　1984．1）
8　『週間朝日百科　世界の文学50　テーマ編　ノンフィクション文学』（朝日新聞社　2000．7．2）
9　国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』（明治図書　1988）
10　佐藤洋一　連載「到達目標としての「言語技術」」（『教育科学国語教育』明治図書　2003．4～2004．3）
11　佐藤洋一編著『国語科を核に総合的学習を創る』（明治図書　2000．4）
12　佐藤洋一編著『実践・国語科から展開するメディア・リテラシー教育』（明治図書　2002．9）

（平成16年８月18日受理）